



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Organ Transplantation Metaphors A Comparative Corpus-Based Study of Life Depictions in Newspapers [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	HUGUET CAÑAMERO, Enric
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16063号
Issue Date	2024-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92949
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Enric_Huguet_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： ウゲット=カニャメロ・エンリック

主査 教授 宮嶋 俊一
審査委員 副査 教授 藏田 伸雄
副査 教授 櫻井 義秀

学位論文題名

Organ Transplantation Metaphors

A Comparative Corpus-Based Study of Life Depictions in Newspapers

(臓器移植のメタファー

—コーパスに基づいた、新聞における命の表現に関する比較研究—)

当該研究領域における本論文の研究成果：本論文は、日本・スペイン・米国・韓国の4カ国の新聞記事コーパスを用いて、各国で移植医療がいかなるメタファーで語られているかを分析し、その特徴を明らかにしたものである。スペインでは盛んな脳死者からの臓器移植がなぜ日本では根付かないのかという問題意識から申請者の研究は出発しているが、本論文はその違いの背後にある各国の宗教的・文化的状況がメタファーとしてメディアで語られていることに注目し、新聞記事コーパスを分析した。そのために申請者は認知言語学で用いられてきた概念メタファー理論を応用している。日本で脳死者からの臓器移植が増えない原因を宗教的・文化的背景から説明しようとした研究はこれまでにあったが、その多くは印象論に過ぎない。本論文もその関係を直接的に解明してはいないが、これまで曖昧に語られていたものを可視化し、その関係を説明するための素材の抽出に成功した。

本論文の第一部では、この概念メタファー理論が丁寧に紹介され、同時に本研究にそれを応用することの有効性も論じられる。また第二部は調査研究の成果である。調査対象国として、日本とスペインだけでなく、米国と韓国が加えられているのは「欧米」としてキリスト教圏を一括りにせず、カトリック圏のスペインにプロテスタントが盛んな米国を加え、さらに（東）アジアとして日本だけでなく韓国も調査対象とすることで、よりグローバルで綿密な比較研究を意図したためである。

本研究の成果として第一に指摘できるのは、これまで明確に語ることが難しかった、各国の移植医療の背後にある宗教的・文化的状況の違いをメタファーの違いとして解明した点である。脳死臓器移植の先行研究ではこうした宗教的・文化的状況が「日本は仏教国だから」や「スペインはキリスト教圏に属するから」のように曖昧に説明されてきたのに対し、本論文ではコーパスの精緻な分析により、その違いの内実を具体的かつ明確に示すことに成功した。第二に、本研究はグローバルな比較研究として価値がある。同じキリスト教圏とは言え、米国では「贈り物」という考え方が根強いのにに対し、スペインでは「連帯」が強調されること、また東アジアの仏教文化圏として括られがちな日本と韓国においても「つながり」と「わかちあい」という認識の違いがあることなど、興味深い指摘がいくつも示された。申請者は母語であるスペイン語に加え、日本語、英語、さらにはハングルも駆使して本研究を遂行し、韓国での半年間の研究滞在による情報収集も行っている。個人研究としての限界はあるが、一人で4カ国の比較分析を行い一定の成果を上げている点は、審査委員会でも高く評価された。第三に、本研究の資料的価値の高さも評価された。本論文の後半には調査研究の結果が充実した Appendix として付されているが、それも含めて本研究は今後、移植医療の国際比較研究が行われる際の礎石になると考えられる。なお、本論文は、申請者がこれまで国内外の学会で果たしてきた口頭発表や公刊された論文などの研究成果の蓄積に基づく。例えば、本論文の第4章は生命倫理分野で著名な国際学術誌、“The New

Bioethics” 誌に掲載された論文に、また第4章は海外で出版された談話分析の研究書 (T. Fernández Ulloa & M. Soler Gallo (Eds.), El discurso como herramienta de control social (2003), Peter Lang) に収録された論文に基づく。こうしたことからわかる通り、本論文に収録された研究成果は、すでに国際的にも高く評価されている。

ただし、審査の過程において本論文におけるいくつかの問題点も指摘された。第一に、各国の移植医療のあり方を決める上で重要な役割を果たしているのは、宗教や文化、それらが形成し新聞記事などに現れてくる国民意識だけではなく、むしろ各国の医療のあり方、その歴史、さらには社会情勢などであり、それらについての言及が不足しているのではないか、というものである。第二に、メタファー分析の結果を踏まえ、各国に存在する宗教的・文化的な傾向と移植医療に対する考え方やそのあり方の違いとの関係についてより踏み込んだ分析をすべきではないか、というものである。だが、こうした問題は申請者にも十分自覚されており、口述試験では、本論文では扱う内容を限定することで主張の確実性を高めることを目指したゆえ、論証困難な事柄への言及を回避した旨、説明された。委員会としても、これらは今後の課題と捉えるべきことであり、博士論文としての瑕疵にあたらないと判断した。

学位授与に関する委員会の所見：本審査委員会は、以上の審査結果に基づき、全員一致で、本論文提出者に博士(文学)の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。